さかまた

鴨川シーワールド　NO.47

シーワールドのアニマル達

●キタオットセイ

北太平洋の小島で繁殖期をすごしたキタオットセイは、9月から11月にかけて南方への回遊を開始し、その後、未成熟個体と雌の成獣が三陸沖から常磐沖にかけての太平洋沿岸にやって来ます。これらの個体は、6月頃に帰島のための北方回遊を始めるまで滞留し、海上生活を続けますが、中には衰弱し、緊急保護の必要がある個体が、海岸などに上陸することがあります。当館では今年の2月22日に館山水産事務所の依頼により、館山市の相浜漁港で衰弱し上陸していた雌の成獣を保護しました。その20日後の3月13日には、雄の幼獣が千葉県印旛郡白井町で保護され、千葉県水産課の依頼により、当館へ搬入されました。この個体は、海から遠く離れた白井町の路上で発見されたので、テレビや新聞の報道で話題となり、一躍、有名人（獣）？となった個体です。この2頭はいずれも栄養状態が悪く、体調も不良であったため、獣医と飼育係員のチームによる治療と特別看護が続けられました。そのかいがあり、1ヶ月後には2頭共にみちがえるように元気になり、体重の増加もみられたため、仲間が北方の回遊を始める前に、海に戻す計画が立てられました。水温や放流位置など慎重に検討がなされた後、千葉県の取締船「ふさかぜ」の協力を得て、それぞれ3月26日と4月17日に銚子沖で放流され、飼育係員の見守る中、2頭共元気に北の海へと旅立って行きました。

（金野）

▲キタオットセイ　*Callorhinus ursinus*

●ミナミトビハゼ

リニューアルオープンしたパノリウムに河口域に広がる干潟を再現した水槽があります。その中にカニ類にまざり魚の形はしているもののカエルのようにとび出たギョロ目をもち、泥の上を動きまわる奇妙な生物がいます。跳びはねるハゼの仲間のトビハゼです。今回紹介するのは、日本では鹿児島県奄美大島以南に生息する、全長10cmほどのミナミトビハゼです。魚であるのに陸上生活にも適応し、水の外で長い時間生活できるように他の魚にはみられない特徴をもっています。とび出た眼はその下にあるくぼみに入れることができ、胸鰭は陸上をはいまわれるように太く腕のようになり、さらに腹鰭は、岩や流木などの垂直な場所にへばりつけるように吸盤状に変化しています。また、皮膚の表面近くにも毛細血管が発達した部分があり、そこで皮膚呼吸をすることができるだけでなく、袋のようになったえらぶたに水をため、この水を使って空気中でもえら呼吸をすることができる機能ももっています。

干潟の水槽をゆっくりとご覧下さい。人が近づくとはじめはピョンピョンとはねて、水槽の奥の方へ逃げてしまいますが、そっと見ていると徐々に近づき、ガラス面や岩などにはりついたり、時には、巣穴の中でシャコやオサガニと一緒にいるところが見られます。愛きょうのある顔つき、活発に跳びはねる姿は、きっと皆さんを喜ばせてくれることでしょう。

（大澤）

▲ミナミトビハゼ　*Periophthalmus vulgaris*

さかまた　No.47　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18

☎(04709)2－2121

発行日　平成8年7月

ロシアからのベルーガ

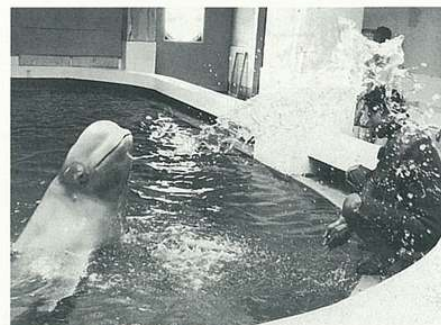
~デュークとマーシャの 2,000日~

▲ガラスごしにお客様にあいさつするベルーガ（中央：デューク　右：マーシャ　左：ナック）

ロシアからやって来たオホーツク産のベルーガ2頭が、4月14日に2,000日を迎えました。この2頭のベルーガはウラジオストクの太平洋海洋漁業研究所（ＴＩＮＲＯ）で飼育されていた個体で、平成2年10月24日に当館に搬入された雄・雌各1頭です。ロシアからの搬入経緯と輸送については、さかまたNo.36でお知らせしましたので、今回はこの2頭のその後についてご紹介します。

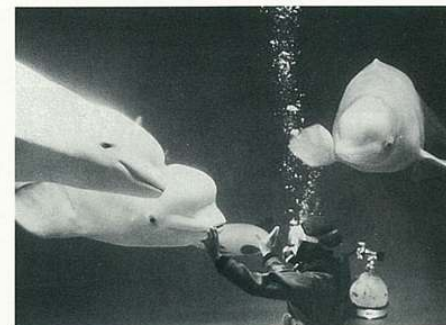
後に一般公募により、雄は「デューク」、雌は「マーシャ」と名付けられたこの2頭は、マリンシアターのトレーニングプールに搬入され、飼育が開始されました。まず最初の作業はベルーガに餌を食べさせることです。昭和63年にカナダからやって来た「ナック」の場合には、人の手からスムーズに餌を食べるようになるまで約1ヶ月もかかったので、この2頭についても簡単には食べないかもしれないと思っていました。しかし、この2頭はロシアで飼育されていた個体であったため、デュークは搬入翌日より水上に顔をあげて係員の手から摂餌し、マーシャも1週間ほどで餌を食べ始めるなど、比較的スムーズに餌付けをすることができました。餌付けが終了したところで、ショーへの出場をめざし、トレーニングが開始されました。おりしもマリンシアターのリニューアル工事と重なり、いろいろな支障がありましたが、なんとか平成3年7月20日のリニューアルオープン当日には、そろってショーデビューすることができました。

▲「アーン!!」（デューク）

搬入から5年半も過ぎると、彼等とのつきあいを通していろいろなことを発見し、搬入当初いだいていたイメージとは大きく変わってきています。マーシャはおっとりとしていてはずかしがり屋というイメージで、初めの頃は何にでもすぐに驚き、臆病なところがありましたが、1度慣れてしまうと今度は何にでも興味を示し、すぐに遊びの道具にしてしまいます。ショーや訓練に使うために苦労して作った小道具などはかっこうの獲物？となり、マーシャにこわされた数は数えきれないほどです。また、「水族館まるごとウォッチング」で裏方を訪れたお客様に、口をすぼめて水鉄砲のように水をかけることも憶えてしまいました。このように目の離せない赤ん坊のようで、常にトラブルメーカーであるマーシャですが、係員に気づくとまっ先に寄って来て、あまり美しいとは言えない声でしきりに鳴きかけてくるのを見ると、日頃の苦労も消え、思わずそのやわらかなオデコをなでてしまいます。いっぽうデュークは人なつっこく、誰にでも愛きょうをふりまく目立ちたがり屋といったイメージでしたが、年と共に落ち着きがまし、体が大きいこともあって、今では「大将」といった風格さえ感じさせるようになりました。責任感が強くしっかり者ですが、ガンコなところがあり、1度ヘソを曲げるとテコでも動かないところがあります。そんな時でも、大きな体に似あわぬ小さなクリクリとした丸い目を見ると、不思議と怒りもおさまり、逆にこのガンコさをかわいく感じることさえあります。

▲ダイバーに甘えるマーシャ

▲水鉄砲でビショビショ（マーシャ）

▲一緒に遊ぼう!!（左からナック、デューク、マーシャ）

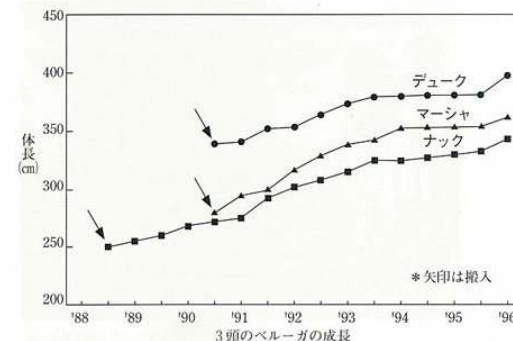
デュークもマーシャも搬入時と比べ、ずい分大きくなりました。搬入時、体長 280cm、体重418kgだったマーシャは、現在、体長 362cm、体重 600kgにもなり、現在飼育されている3頭のベルーガの中で最も大きなデュークは、搬入時の体長 339cm、体重 558kgからそれぞれ 399cm、740kgまでに成長しています。オホーツク海で暮らしているベルーガは、カナダ北東部のハドソン湾で暮らすベルーガと比較すると、背部の隆起部が長く、全体的にずんぐりとした体型をしていますが、体の大きさに比べて、尾鰭が小さいような印象をうけます。ベルーガは成長と共に体色が灰色から白色に変化していきますが、ナックもデュークも全身白色ですが、マーシャはいまだに灰色味が強く、体色からだけから見るとまだ幼さを感じさせてくれています。

現在、マリンシアターでは、実験を通して、イルカ類の優れた水中での能力を紹介していますが、デュークもマーシャも現在、主役として活躍している先輩格のナックに、追いつき追いこせと日々がんばって毎日の訓練にはげんでいます。ご来園の際には、ぜひそのすばらしい能力をご覧いただくと共に、それぞれの性格についても注目してもらったならば、きっと新しい発見があると思います。

（金子・牧野）

3頭のベルーガの成長

トピックス

秋篠宮殿下御一家ご来園

▲トドショーをご覧になる御一家

平成8年3月21日から23日までの3日間、秋篠宮殿下御一家が、南房総をご旅行され、3月22日には、鴨川シーワールドをご視察されました。今回のご旅行は、秋篠宮殿下が幼稚園ご入園時に訪れられた南房総を、今年、幼稚園ご入園を迎えられる眞子さまにもお見せしておきたいとの殿下のご意向によって実現のはこびとなりました。

当館を視察された3月22日はあいにく雨天でしたが、鳥羽山総支配人、大嶋水族館長のお出迎えの中、お車でご到着になった御一家は、貴賓室にてご小憩の後、魚類、海獣両展示係長のご案内で、パノリウムをはじめ、館内に展示されている数々の海のいきものたちを興味深くご覧になり、ベルーガやシャチのショーにも拍手を送っておられました。この間、魚のフィーディングタイムやシャチのキスプレゼントなどの動物達とのふれあいコーナーにもご参加いただき、あいにくの雨もすっかりあがってさわやかな春の日ざしがさす中、ゆっくりとおすごしいただくことができました。眞子さまには、動物達とのふれあいにご満足いただけただけでなく、園内をご一緒した「オルタン」などのぬいぐるみも大変お気に入られたご様子でした。ご家族思いの殿下、妃殿下の私共に対するあたたかなお心づかいと眞子さまの愛らしい笑顔など、私たち一同にとって日頃の苦労を忘れさせてくれる感激と満足感のあふれた一日でした。（荒井）

▲シャチの歓迎をお受けになる妃殿下

▲オルタンとご一緒の眞子さま

▲眞子さまとフンボルトペンギン

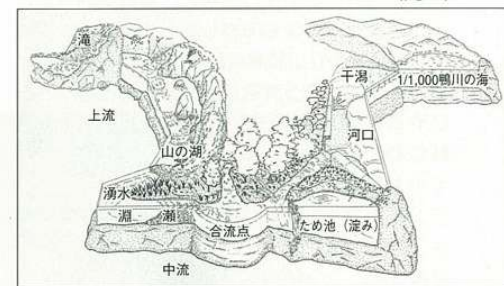
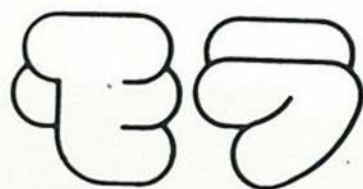
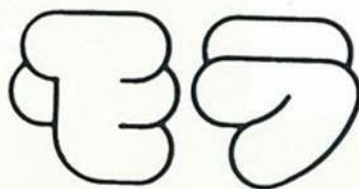
流れの水槽 リニューアルオープン

▲支流との合流点

平成6年にリニューアルしたウェーブ・インプレッション・ゾーン（波の水槽）に続いて、今回は川の上流から海にいたるまでの水辺の情景を一新しました。波の水槽と同様に「自然の再現」につとめた新水槽では、水の流れの中で魚やエビ、カニ類をはじめ、貝や水生昆虫、イモリやカメ、水鳥など、幅広い生物を混養展示しています。また四季折々の草木は、すべて本物を配置し、雨や時と共にうつり変わる空の情景などの自然現象も再現しました。水槽ごとのしきりは、砂利を盛りあげたり流木などを使い、景観をそこねないよう工夫をこらしました。このようにして春休みの一般公開を迎えたのですが、水の生き物達は、私達の予想に反して次々とトラブルを起こしてくれました。しきりの無いことをあざ笑うかのように、滝のぼりをするアメリカザリガニ、ため池水槽をよじ登り隣の河口の防潮堤でコウラ干しをするイシガメ、観客通路を行進するサワガニなど、係員としては一時も目を離せない毎日が続きました。しかし、これらお騒がせ動物達も彼らに最適なすみ家となるように石組みや照明を工夫してやることにより、最近ではようやく落ち着いてくれるようになりました。

新しいパノリウムをじっくりと見ていると、ふるさとの田舎で見た「せせらぎ」や、足元をぬうように泳ぎ去った小魚の群れなど、記憶の中で今も生き続けているなつかしい光景がよみがえってきます。みなさんにも日本のすばらしい自然を感じてもらえるものと信じています。

（岡田）

▲流れの中のオイカワ *Zacco platypus*

▲リニューアルした「流れの水槽」

●ラブリードルフィン

昨年の10月1日に鴨川シーワールドはオープン25周年を迎え、いろいろな催し物が行われました。そのひとつとして11月1日から30日まで、「ラブリードルフィン」が実施されました。この催し物は、多くの人達にイルカをより身近に感じ、その魅力を知ってもらおうと企画されたもので、のべ309名の方にイルカとのふれあいを楽しんでもらいました。参加者はトップブーツ（胴長）を着用し、水深約50cmのプールの中で、トレーナーの説明を聞きながら、泳いでいるイルカにさわったり、エサをあげたりと心ゆくまでイルカとのスキンシップを楽しみました。この愛らしいイルカとのひとときの写真は、参加者全員にプレゼントされ、新たな感動と共によい想い出となったことと思います。（宮下）

●ペンギン親善大使とスノーフェスティバル

長野県大町市のサンアルピナ鹿島槍スキー場で平成7年11月23日に行われたスキー場開きに、鴨川シーワールドのオウサマペンギン4羽とジェンツーペンギン3羽が、鴨川市長の親書をたずさえて、親善大使として参加しました。大町市の子供達にとってペンギンは大変めずらしく、記念写真をとったり、おそるおそるさわったりするなど大喜びでした。この時のお礼として平成8年2月10日には、20トンもの雪が大町市より当館へ贈られ、スノーフェスティバルが開催されました。いつもは室内の人工雪の上で暮らすオウサマペンギンが、屋外の北アルプスの雪の上をヨチヨチ歩く姿が見られ、雪遊びのコーナーも作られて、鴨川市の子供達は大喜び。このペンギンがつないだ両市の友好が今後もさらに続いていくことを私たちは、期待しています。

（桐畑）

●第8回 国際海洋生物研究所 研究集会開催

今回で8回目を迎えた国際海洋生物研究所主催による研究集会が千葉県立長狭高等学校文化ホールにて、2月3日、4日の2日間にわたり行われました。今回の研究集会は「新時代における研究の現状」をテーマに国内外の研究者110名が参加し、13題の発表が行われました。当館とは姉妹水族館でもある、アメリカのシーワールドのブラッド・アンドリュウス氏の発表は、今後の海獣類の飼育に関する内容で、飼育関係者にとって大変有意義なものでした。また、一般講演会は落語家の立川談志師匠をお招きし、「談志、海と遊ぶ」という演題で、師匠の海とのつきあいや環境問題などの多岐にわたる内容を、ウイットに富んだ軽妙なテンポでお話しいただき、300名の聴衆をわかせました。（勝俣悦）

●特別展示オープン

平成8年4月26日より、ピノキオハウスの特別展示が内容を一新し公開されています。今回は水生生物の口にスポットをあて、無脊椎動物を中心に、口の位置や形態的な特徴について、生物と標本の展示やクイズを通して理解してもらえるようにしています。遊びのコーナーでは、口の形や位置を変えることによる人の表情の変化や自分の顔と動物の口との合成を楽しめるよう工夫されています。また、今回は特に質問ボックスを設置し、水生生物の口に関する質問を受け、後日回答するコーナーを設け、お客様がいだいている疑問解消のお手伝いをすると共に、展示解説の改善に役立てようと考えています。タイトルは「クラゲのキスマーク？　ー水の生きもの口くらべー」

さて、その答は‥‥？

（中坪）